

## 薰と宇治と屈原の「遠遊」

劉 安琪

### 一、はじめに

宇治十帖の物語は薰の宇治訪問につれて展開する。発端の橋姫では、大君と中の君を垣間見し、大君を恋い慕うようになる。夢浮橋では、浮舟を失った嘆きを以て物語の幕を閉じる。ところで、『源氏物語』では、登場人物が都からかけ離れた場所を訪れる例が少なくない。光源氏が加持を受けるため北山へ赴くこと、光源氏の須磨謫居、中の君や浮舟に会うために宇治を訪う匂宮などである。これらに比すれば、薰の宇治訪問には際だった特徴があるように思われる。仏教に救いを求めて俗聖八の宮を慕い、宇治へ通ううち、法の友となった。いつしか大君に心惹かれるようになり、恋慕するものの、大君は死の瀬戸際までかたくなに拒み通したのだった。大君の没後は中の君に思いを寄せ、そののち、大君の形代としての浮舟と契りを結んだ。仏に帰依して精神の救いを求めていたはずの薰が、恋の葛藤に苦しむ道を自ら選び取っているようにさえ見える。すなわち、聖を訪問するべく異郷に通い始めたものが、「女性を希求する」ことへと変転することこそ、薰の宇治訪問の特徴であるといえよう。

夙に、漢文学との比較研究においては、若紫、蜻蛉、および橋姫の垣間見に、唐伝記である張鷟の『遊仙窟』との類似が指摘された。首肯すべき点多々あり、すぐれた成果として尊重したい。ただし、異

郷訪問のモチーフ、ならびに仏道を志向しながら女性を求める薰の造型には、漢文学でいう「遊仙」が思い出される。「遊仙」は「遠遊」と「遇仙」との二重の面を含む。仙人などを尋ねるため、また修道のため、都や故郷から遠く離れた山林や水辺のような場所へ赴き、異世界に分け入って、仙人に出会う。とりわけ「遠遊」は、俗世を疎んじ、道を求めて遠く異郷に遊ぶ。まさにこれは、薰の宇治訪問ではないだろうか。その源泉と考えられるのが、屈原の「遠遊」「離騷」である。

本稿では、宇治十帖における薰の宇治訪問への、屈原の「遠遊」「離騷」の影響を考察する。

### 二、屈原について

屈原は、中国・戦国時代に、楚の詩人かつ政治家として活躍した人物である。楚の王族である屈原は、懷王に深く信任され、三閭大夫として重用された。頃襄王のとき、讒言によって追放された。時世を憂えて悩んだ末、汨羅の川に身を投じて命を終えた。屈原は苦しみや悲しみが多い現世を離れたく、憧れている聖を訪れるため、異郷に遠遊する。屈原が異郷で聖、仙人、神女に出会う話は、遠遊文学の源流のひとつとされる。屈原の故事や作品などは、後世の文学に多大な影響

を与えたのであった。『和漢朗詠集』巻下・四四四に、題「鶴」として、「似屈原之在楚、衆人皆醉（屈原が楚に在しに似たり、衆人皆酔へり） 鶴処鶏群賦<sup>1</sup>」という章句が収められる。『江吏部集』や『本朝麗藻』も、屈原に言及する。

『源氏物語』には、屈原の名を出す箇所は認められない。ただ、つぎのような例がある。

まだ申の刻ばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にてても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもかしさもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。

〔源氏〕唐国に名を残しける人よりも行く方しられぬ家居をや  
せむ  
（須磨<sup>②</sup>一八六頁）<sup>②</sup>

流離の身の上を憂える源氏は、流謫先の須磨に到着して一首を詠じた。その上句にある「唐国に名を残しける人」を、『紫明抄』<sup>③</sup>は「楚屈原をいふ」、『河海抄』<sup>④</sup>は「楚の屈原かはなれたりし事を云」と注す。流謫ならば、業平や白居易などの人物もいる。古注釈が示す通り、物語の作者は名指しこそしないものの、罪も無く配流された屈原に重ね合わせていたのではなからうか。ならば、『源氏物語』の作者は屈原を理解しており、あるいは作品に織り込んだ可能性もあるのではないかとも思うのである。

### 三、薫の宇治訪問と屈原の遠遊

薫は、俗聖である八の宮に会うため、宇治に通い始めた。屈原も、

現世の苦悩からのがれたいと思ひ、昔の聖を訪ねて遠い場所へと向かった。薫の宇治訪問と屈原の遠遊には、共通項がうかがえる。まずは『源氏物語』の本文を辿り、薫の宇治訪問の原点を確認する。

#### 1、薫の宇治訪問の原点

宇治に移り住んだ八の宮は、仏道修行に励む日々を送っていた。宇治山の阿闍梨に教えを乞い、在俗でありながら、聖同然に暮らしていた。冷泉院に参上した阿闍梨は八の宮のことを語った。同席した薫は、八の宮のところがけや俗聖の生活に興味をもち、八の宮との対面を願った。

〔薫〕宰相中将も、御前にさぶらひたまひて、我こそ、世の中をばいとすさまじく思ひ知りながら、行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れ、と人知れず思ひつつ、俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに、と耳とどめて聞きたまふ。（略）中将の君、なかなか親王の思ひすましたまへらん御心ばへを対面して見たてまつらばやと思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の帰り入るにも、〔薫〕「かならず参りてもの習ひきこゆべく、まづ内々にも気色たまはりたまへ」など語らひたまふ。

（橋姫<sup>⑤</sup>一二八―一二三〇頁）

薫は、八の宮との対面実現を阿闍梨に託した。宇治に戻った阿闍梨は、さっそく八の宮に薫の希望を伝えた。

阿闍梨、中将の君の道心深げにものしたまふなど語りきこえて、「法文などの心得まほしき心ざしなん、いはけなかりし齡より深

く思ひながら、え避らず世にあり経るほど、公私に暇なく明け暮らし、わざと閉ぢ籠りて習ひ読み、おほかたはかばかしくもあらぬ身にしも、世の中を背き顔ならんも憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ紛らはしくてなん過ぐしくるを、いとありがたき御ありさまをうけたまはり伝へしより、かく心にかけてなん頼みきこえさするなど、ねむごろに申したまひし」など語りきこゆ。

(橋姫⑤一三一頁)

傍線部のように、阿闍梨は、八の宮に対し、薫が仏道に熱心で道心が深いと説いた。阿闍梨は薫が抱く厭世観を知らないのである。薫は、「我こそ、世の中をばいとすさまじく思い知」るのだ(前掲、橋姫⑤一二八頁)と自覚する。このような観念のゆえを、『弄花抄』は、「薫の道心は柏木のことをほのかにき、しより也、跡をもとふらははやの心也」(『弄花抄』橋姫⑤)と説明する。幼い時分から、薫は自分の出生に疑念を持っていた。薫の仏道心の原点は、彼が恒常的に抱える厭世観だったのである。

〔薫〕幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおぼつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし。宮には、事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいたき筋なれば、世ととも心のかけて、〔薫〕「いかなりけることには。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞ独りごたれたまひける。(略)かの過ぎたまひにけんも安からぬ思ひにむすほはれてや、など推しはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、元服はものうがりたまひけれど、

(匂兵部卿⑤二二—二五頁)

薫は、すでに幼少期に、女房たちの話から、自身の出生に纏わる秘密を察知していた。身の上について「問ふべき人もなし」と、自問自答するばかりで不安を募らせていたのであった。右の傍線部「世をかへても対面せまほしき心つきて」は、亡くなった実父に来世で会いたいという気持ちである。これは薫の道心の原点である。元服にも乗る気ではない。その先には結婚がある。出家を切望する薫には億劫だったのである。

物語では、薫の女性関係に対する考えや態度も描かれる。

〔薫〕中将は、世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なれば、なかなか心とどめて、行き離れがたき思ひや残らむなど思ふに、わづらはしき思ひあらむあたりにかかづらはんはつつましくなど思ひ棄てたまふ。さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにやありけむ。人のゆるしなからんことなどは、まして思ひよるべくもあらず。十九になりたまふ年、三位宰相にて、なほ中将も離れず。帝、後の御もてなしに、ただ人にては憚りなきめでたき人のおぼえにてもしたまへど、心の中には、身を思ひ知る方ありて、ものあはれになどもありければ、心にまかせてはやりかなるすき事をささ好まず、よろづのこともてしづめつつ、おのづからおよすけたる心ざまを人にも知られたまへり。

(匂兵部卿⑤二九—三〇頁)

薫は冷泉院に厚遇されるが、世の中を「あぢきなきもの」と考えている。女性や恋愛に執着心を持てば、この世を捨てがたく思われてしまおうと、殊更、女性関係に消極的な態度であった。世間並みの男性とはまったく異なり、「心にまかせてはやりかなるすき事をささ好

まず」のようなありさまで、気の赴くままに好色に耽ることなど決して好まない。「聖」のような生活を心から望んではいるものの、日常の公私事に煩わされることが多く、仏道に専念することもままならないのがもどかしいのである。八の宮の生き様に惹かれるのもそのためであろう。

中将の君、なかなか親王の思ひすましたまへらん御心ばへを対面して見たてまつらばやと思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿闍梨の帰り入るにも、「薫」「かならず参りてもの習ひきこゆべく、まづ内々にも気色たまはりたまへ」など語らひたまふ。

(橋姫⑤ 二二九—二三〇頁)

〔薫〕宰相中将も、御前にさぶらひたまひて、我こそ、世の中をばいとすさまじく思ひ知りながら、行ひなど人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れ、と人知れず思ひつつ、俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに、と耳とどめて聞きたまふ。

(橋姫⑤ 二二八頁(再掲))

右にあるように、薫は、仏道修行に専心したいがために、都とは異なる世界、宇治を訪れたのであった。ここで、薫の厭世が、八の宮のそれとは違う点には注意すべきだろう。八の宮の厭世的な姿勢は、自身の運のつたなさに基づいていた。仏教は、八の宮の精神的な支えにはかならなかった。

そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。母方などもやむごとなくものしたまひて、筋ことなるべきおぼえなどおはし

けるを、時移りて、世の中にはしたなめられたまひける紛れに、なかなかいとなごりなく、御後見などものの恨めしき心々にて、かたがたにつけて世を背き去りつつ、公私に拠りどころなくさし放たれたまへるやうなり。

(橋姫⑤ 一一七頁)

このたびは男にてもなど思したるに、同じさまにてたひらかにはしたまひながら、いといたくわづらひて亡せたまひぬ。宮、あさましう思しまどふ。

(橋姫⑤ 一一八頁)

悲運は、八の宮が立坊騒動に担ぎ出されたことに始まった。やがて到来した光源氏権勢の世の裏で、八の宮は冷遇され、世の中からすっかり忘れ去られてしまった。晩年に二人の子どもに恵まれ、喜んだのも束の間、北の方が死去。零落し、すべてを喪失したことから生じた厭世観なのであった。

一方、薫の場合、喪失どころか、生活は満ち足りていた。

〔薫〕二品の宮の若君は、院の聞こえつけたまへりしままに、冷泉院の帝とりわきて思しかしづき、後の宮も、皇子たちなどおはせず心細う思さるるままに、うれしき御後見にまめやかに頼みきこえたまへり。御元服なども、院にてせさせたまふ。十四にて、二月に侍従になりたまふ。秋、右近中将になりて、御賜ばりの加階などをさへ、いづこの心もとなきにか、急ぎ加へておとなびさせたまふ。

(匂兵部卿⑤ 二二—二三頁)

光源氏の子として厚遇され、冷泉院、秋好中宮らの特別な恩顧により、若いうちから異例の栄進を遂げた。世間からみれば、高貴な出生



と申し分のない人生である。けれども、薫は、自分の出生に疑念を抱き、密かに苦悩していた。仏道に惹かれ、救いを求めていた。そこで、「俗聖」という理想的な生活を送る八の宮を訪ねて、宇治へ赴いたのだった。現世の苦悩から逃れたいと思ひ、憧れの聖との対面を求めて、日常世界を離れて異郷を訪問する点は、次項で見る屈原の遠遊を思わせる。

## 2、屈原の遠遊の由緒

屈原には「遠遊」と「離騷」がある。両作品は、現世に対する不満を解消したい屈原が、昔の聖や仙人を訪れようと遠い所に赴くという似通った内容である。「遠遊」の冒頭では、現世へのもの足りなさをつぎのように表す。

悲時俗之迫阨兮、願輕拳而遠遊。時俗の迫阨を悲しみ、輕拳して遠遊せんと願へども

と願へども

質菲薄而無因兮、焉託乘而上浮。質菲薄にして因るなく、焉くにか託乗して上浮せん。

遭沈濁而紆機兮、独鬱結其誰語。沈濁にして紆汚機なるに遭ひて、独り鬱結して其れ誰にか語らん。

(略)

聞赤松之清塵兮、願承風乎遺則。赤松の清塵を聞きて、風を遺訓に承けんと願う。

(「遠遊」冒頭)<sup>6</sup>

「離騷」では、「聖」を訪問する願いを、つぎのように述べる。

昔三后之純粹兮、固衆芳之所在。昔三后の純粹なる、固に衆芳の在る

所。

雜申椒與菌桂兮、豈維紉夫蕙蒭

申椒と菌桂とを雜ふ、豈維夫の蕙蒭を紉ぐのみならんや。

彼堯舜之耿介兮、既遵道而得路。

彼の堯舜の耿介なる、既に道に遵ひて路を得たり。

忽反顧以游目兮、將往觀乎四荒。

忽ち反顧して以て目を游ばしめ、將に往きて四荒を觀んとす。

馳玉虬以乘鸞兮、溘埃風余上征。

玉虬を馳として以て鸞に乗り、溘ち風に埃あけて余上り征く。

朝發軫于蒼梧兮、夕余至乎崑圃。

朝に軫を蒼梧に發し、夕に崑崙に至る。

(「離騷」摘句)

「遠遊」の「悲時俗之迫阨兮、願輕拳而遠遊」は、現世には悲しみが満ちており、苦悩に纏いつかれるのを避けるため、遠い所に遊びたいとする願望を述べる。「独鬱結其誰語」は、一人で悩み、周りに話し相手はいないことをいう。「聞赤松之清塵兮、願承風乎遺則」は、修道して仙人になった赤松子の行跡を辿り、その清潔な行いに従うことを願う。

「離騷」に掲げられた「三后」、「堯舜」は、どちらも昔の聖である。

「純粹」「耿介」も、聖たちの心柄を表現する。憧れている聖の心柄に惹かれ、対面を求めるため、異郷に遠遊する。題目「離騷」は、離れる意の「離」と、憂えや苦悩を表す「騷」で、現世の苦悩から離れることと解される。屈原からみれば、自分が現世に容れられない苦悩から脱するために、その地を離れるのである。

この異郷訪問の端緒をめぐり、屈原と薫とを比較すると、いずれも、他人には理解できないような苦悩を抱え込み、相談する相手とて

いない。絶えず孤独にさいなまれている。ただ悲しみの多い現世を厭い、精神の救いを求めている。はじめは異郷に住む聖の心持ちを慕って、そこを訪れるのも共通する。興味深いのは、両者が揃いも揃って、異郷訪問の途上、当初の目的とは相違して「女性への希求」に目覚めることである。

#### 四、異郷で女性を求める話型

「離騷」の後半では、異郷に至った屈原が「求女」、すなわち女性に求婚しながら、思いを遂げることができないことが語られる。

忽反顧以流涕兮、哀高丘之無女。

忽ち反顧して以て流涕し、  
高丘の女無きを哀しむ。

溘吾遊此春宮兮、折瓊枝以繼佩。

溘ち吾此の春宮に遊び、  
瓊枝を折りて以て佩に繼ぐ。

及榮華未落兮、相下女之可詒。

榮華の未だ落ちざるに及んで、  
下女の詒る可きを相ん。

吾令豐隆乘雲兮、求宓妃之所在。

吾豐隆をして雲に乗り、  
宓妃の所在を求めしむ。

解佩纓以結言兮、吾令蹇脩以為理。

佩纓を解いて以て言を結び、  
吾蹇脩をして以て理を為さしむ。

(略)

雖信美而無礼兮、來違棄而改求。

信に美なりと雖も而も礼

無し、來れ違棄して改め  
求めん。

(略)

望瑤台之偃蹇兮、見有娥之佚女。

瑤台の偃蹇たるを望み、  
有娥の佚女を見る。

吾令鳩為媒兮、鳩告余以不好。

吾鳩をして媒を為さしむ  
るに、鳩余に告ぐるに好  
からざるを以てす。

(略)

及少康之未家兮、留有虞之二姚。

少康の未だ家せざるに及んで、  
有虞の二姚を留めんにも。

理弱而媒拙兮、恐導言之不固。

理弱くして媒拙なれば、  
導言の固からざるを恐る。

(「離騷」摘句)

屈原は、「宓妃」・「有娥之佚女」・「虞之二姚」の三人に結婚の意を伝えたが、相手の性格やお互いの不信などにより、三回とも成就しなかった。三人の女性に三度求婚し、失敗することに注意しよう。薫の恋もまた、宇治の姉妹三人へ向けられたが、大君の急死、中の君への自制、浮舟の喪失により、ことごとく成し遂げられない結末となった。「三」という数字を重視してよいならば、これはたんなる偶然とは言いがたいのではないだろうか。

宇治十帖で展開された薫の恋の行く末は、屈原の「求女」の結末に似通っている。もともとの目的に背き、次々と成就できない恋がもたらした苦悩や葛藤に苦しむところも同じである。

もつとも、両者の相違点も見い出す。屈原の現世に対する苦悶、遠遊や聖への訪問は、主に政治的な問題に起因した行為だった。「求女」も、「賢妃」、あるいは君主からの信任を求めることの譬えと解される。宇治十帖の薫による異郷訪問の本来的な目的は、いつしか求婚譚へと変質を遂げた。『源氏物語』の作者は、「離騷」の政治的な内核を切り捨てて主題的に踏まえたと考えられる。また、薫の宇治訪問・恋愛には道心と愛情の欲望との争いが見られる。大君の場合はまだ実の男女関係に踏み込まない特徴が見える。浮舟の物語に移ってから、道心を失いつつ現世の欲望に耽る傾向が見える。それも屈原の求女と異なる展開である。しかし、『遊仙窟』における「一男二美」や「一夜の歓楽」の常套を打破し、異郷で次々に三人の女性に恋を寄せるものの、三回とも成し遂げないという格別な展開は、屈原の異郷訪問を念頭に置いた構想であると考えられる。

## 五、薫の人物像と屈原

人物造型の面においても、薫と屈原とは類似する点がある。異郷への「遠遊」、「求女」ではないそれを確認しよう。

薫は、光源氏の子として生まれた。

夜一夜なやみ明かさせたまひて、日さし上がるほどに生まれたまひぬ。男君と聞きたまふに、(略)人、はた、知らぬことなれば、かく心ことなる御腹にて、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなんと、思ひ営み仕うまつる。(柏木④二九八―二九九頁)

薫の誕生は衆目を集めた。人々の視線は、その出生に絡む内実をも

かき消してしまった。薫の血筋を揺るぎないものにするかのような描かれ方がなされる。続けて、産養や五十日の祝いなど、盛大な儀式が詳細に記される。

宮司、大夫よりはじめて院の殿上人みな参れり。七夜は、内裏より、それも公さまなり。致仕の大臣など、心ことに仕うまつりたまふべきに、このころは、何ごとも思されで、おほぞうの御とぶらひのみぞありける。宮たち、上達部などあまた参りたまふ。おほかたのけしきも、世になきまでかしづきこえたまへど、

(柏木④二九九―三〇〇頁)

三月になれば、空のけしきものうららかにて、この君五十日のほどになりたまひて、いと白うつくしう、ほどよりはおよすけて、物語などしたまふ。

(柏木④三二〇頁)

まるで公的な行事でもあるかのように、文字通り世間をあげて、源氏の末子の誕生を祝福するのである。もはや、薫の出生には一片の疑念も存在しない。そのうえ、三月に五十日の祝を迎える薫は、初春の生まれであるともうかがい知れる。

顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしう恥づかしげに、心の奥多かりげなるけはひの人に似ぬなりけり。香のかうばしざで、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。

(匂兵部卿⑤二六頁)

薫は、「きよら」な最上美の人物としては称賛されていない。けれども、精神的な上品さや奥ゆかしさでは誰も及ばないほどである。くわえて、生まれながらに素晴らしい芳香を帯びている。この世のものとも思われない、どこまでも漂う香りである。

薫の造型には、四つの特質がある。

- 1、高貴な血筋
- 2、初春の生まれ
- 3、精神的な上品さ、奥ゆかしさ
- 4、芳香を帯びる

じつは、屈原にも同じような性質を見い出すことができる。ひとつひとつを確かめようと思う。

「離騷」の冒頭に、つぎのように屈原を紹介している。

帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸。

帝高陽の苗裔、朕が皇考を伯庸と曰ふ。

摂堤貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降。

摂堤孟陬に貞しく、惟れ庚寅に吾以て降れり。

皇覽揆余初度兮、肇錫余以嘉名。

皇覽て余を初度に揆り、肇めて余に錫うに嘉名を以てす。

名余曰正則兮、字余曰零均。

余を名づけて正則と曰ひ、余を字して零均と曰ふ

紛吾既有此内美兮、又重之以脩能。

紛として吾既に此の内美有り、又之を重ぬるに脩能を以てせり。

扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以為佩。

江離と辟芷とを扈り、秋

蘭を紉いで以て佩と為す。

（「離騷」冒頭）

「帝高陽之苗裔兮、朕皇考曰伯庸」は、屈原自らが、帝の末裔であるとし、高貴な血筋をひいていることを掲げる。「摂堤貞于孟陬兮、惟庚寅吾以降」は誕生の時期をいう。「孟陬」について、『六臣註文選』には「庚寅日降下也。寅為陽正、庚為陰正。言己以太歲在寅、正月始春、庚寅之日、下母之体」という注がある。注の通り、正月とは、誕生は正月、初春の頃であった。「皇覽揆余初度兮」から「字余曰零均」までの四句は、生まれから重視されて慎重に名付けられたの意である。「紛吾既有此内美兮、又重之以脩能」の「内美」は、精神的な美質を指し、生まれつきの素質がよく、自身の素養を重視して内在を磨くことをいう。「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以為佩」は、良い香りの草花などを身にまとい、香り高く身を装いことと、香がよい草花で君子の徳を象徴すること、との二重の意味を持つ。薫の生まれつきの香りと異なっているものの、香りを帯びる特質では共通している。それに加えて、このような香りがどうしても消えないことが強調される点にも注意したい。

薫の香りの強さについて、『源氏物語』の本文には、つぎのように描写される。

〔薫〕香のかうばしきぞ、この世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。（略）うち忍び立ち寄らむ物の隈もしるきはのめきの隠れあるまじきにうるさがりて、

（匂兵部卿⑤二六―二七頁）



また、薫は宇治に赴いた夜中には、その香りのために、人々が目を覚ますほどだったとも記される。

隠れなき御匂ひぞ、風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寢覚めの家々ありける。  
(橋姫⑤一三六頁)

さらに、香りが強いあまり、衣の移り香がなかなか消えず、宿直人がせつかくの被物に困惑したともある。

宿直人、かの御脱ぎ棄ての艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣のなよなよといひ知らず匂へるをうつし着て、身を、はた、えかへぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められ、めでらるるなむ、なかなかところせかりける。心にまかせて身をやすくもふるまはれず、いとむくつけきまで人のおどろく匂ひを失ひてばやと思へど、ところせき人の御移り香にて、えも濯ぎ棄てぬぞ、あまりなるや。  
(橋姫⑤一五二頁)

屈原の香も、強くてなかなか消えない特性を帯びている。

佩繽紛其繁飾兮、  
芳菲菲其弥章。  
佩は繽紛として其れ繁く飾り、  
芳は菲菲として其れ弥々章かなり。

(「離騷」摘句)

「離騷」には、香りが著しく立ちこめるといふ。

芳菲菲而難虧兮、  
芳菲菲として虧け難く、

芬至今猶未沫。

芬は今に至るも猶お未だ沫まず

(「離騷」摘句)

さらに、芳しさがいつまでも消えないとする。強いうえに、おとろえることのない香気が、薫と屈原とに共通しているのである。

## 六、おわりに

本稿は、薫の宇治訪問の原点、途中に女性を求める方向への転変に注目し、薫の宇治訪問と屈原の「遠遊」との近似性を検討し、薫の異郷訪問の新たな背景を提示した。あわせて、人物造型をめぐる、薫と屈原との類似点を示し、両者に共通する四つの特質を掲げた。『源氏物語』の作者は、屈原の故事、および「離騷」や「遠遊」に描かれた異郷訪問を念頭に置き、薫の宇治訪問の構想を立てたのではないだろうか。

## 注

- (1) 『和漢朗詠集』は、新編日本古典文学全集19『和漢朗詠集』(小学館 一九九九年)を参照した。
- (2) 『源氏物語』は、新編日本古典文学全集20—25『源氏物語』1—6(小学館 一九九三—一九九八年)に拠る。以下、引用文末尾の括弧内に、『源氏物語』の巻名、新編日本古典文学全集の巻数(丸数字)、頁数を表示する。
- (3) 『紫明抄』は、源氏物語古注集成第18巻『紫明抄』(おうふう 二〇一四年)に拠る。
- (4) 『河海抄』は、玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』(角川書店 一九八六年)に拠る。
- (5) 『弄花抄』は、源氏物語古注集成第8巻『弄花抄 付源氏物語聞書』(桜楓社 一九八三年)に拠る。
- (6) 「遠遊」「離騷」は新釈漢文大系『楚辞』(明治書院 一九七〇年)に拠る。

(7) 『六臣注文選』(『景印文淵閣四庫全書』台湾商務印書館 一九八三—一九八六年)に拠る。

(りゅう・あんき 本学大学院博士後期課程)